

京大地質の特異な行動

瀬戸口烈司

深田地質研究所

The unique activities of the Department of Geology of Kyoto University

SETOGUCHI Takeshi

Fukada Geological Institute

要旨：京都大学の探検の系譜といえば今西錦司から梅棹忠夫につながる流れが強烈で、研究分野では人類学と霊長類学がその代表とされる。しかし、地質学が大いに活動していた。梅棹とほぼ同年の藤田和夫は第三高等学校山岳部の時代の1940年に、北部朝鮮の白頭山の遠征にでかけている。ふたりとも京大に進学後は旅行部に属し、京都探検地理学会の学生会員となって、1942年の大興安嶺探検に参加する。藤田は大興安嶺の地図のない白色地帯を天測航法で踏破する荒業をやったのける。戦後の1955年に藤田は梅棹とともに京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に参加する。この探検隊に刺激された京大山岳部の学生が、京大の学生探検の伝統を復活させて探検部を結成し、1956年にその西部の東部ヒンズークシ、1957年にさらに西のスワート・ヒンズークシに探検隊を出すことに成功した。藤田は1956年隊の隊長をつとめ、1957年の松下進隊に引き継ぐ。地質学が京大探検部の初期の海外活動を支えた。

キーワード：天測、白色地帯、京都探検地理学会

1. はじめに

京都大学には、戦前から、学生が国内だけでなく外地・外国に出かけて、登山・探検活動をするという、奇妙な伝統が根づいていた。現在とちがって、戦前の日本は朝鮮半島と満州地域、台湾をも統治していた。それらの地域は「外地」と呼ばれ、フロンティアの性格も帯びていた。外地は、それら学生にとっては、かつこうの活動の場であったのである。地質学を専攻した藤田和夫は、自己の専門の地質学と探検活動をみごとに結びつけた。その活動は、きわめてユニークである。

深田地質研究所には、いま、京大探検部の卒業

生がふたり在籍している。理事長の田中荘一と理事の私で、ともに探検部の現役部員のころ、京大の伝統にのっとって海外活動に従事していた。その活動の内容は『京大探検部 1956-2006』（京大探検者の会編、2006）にくわしいので、ここではくりかえさない。ふたりは、藤田によって築かれた京大の伝統の忠実なる後継者なのである。あまり知られていない藤田の行跡を紹介したいと思う。

今西錦司が第三高等学校に在学中に創設した山岳部が、学生探検の牙城であった。梅棹忠夫や藤田が今西を師と仰ぎ、三高山岳部を根城に活動を開始した。折しも、今西が中心となって、1939年に京都探検地理学会が発足した。同会には学生会

員の制度があり、梅棹、藤田らは、その学生会員となって入会した。梅棹、藤田らは北朝鮮、中国吉林省にまたがる白頭山の登頂を試みた。この探検を、藤田は次のように記している：

『白頭山の頂上には天池とよばれる火口湖があって、そこをあふれた水は滝となって真北に流れてゆく。そこから先は満州ということになるが、10 万分の 1 の地図があるにはあった。それにはある路線にそった部分だけがえがかれていて、他はまったく空白であった。そしてそれが当時満州で白色地帯とよばれている部分であることをしった。白色地帯の存在はわれわれの探検精神を刺激した。

(この章は) この白色地帯の突破記であるが、結局 6 日間の苦闘のあげくに発見したのは、天池から流れ出た河は、現地できいたように三道白河になるのではなくて、その西側を流れる二道白河になるということであった。その水ははるか松花江をへて黒竜江にはいるのである。とにかくわれわれはその源流のルートマップをつくり、新しい地図を作成することができた。それはコンパスと” かん” だけに頼ったものであったが、白色地帯を貫き、一本の線がはいったことにわれわれは満足した。

これがわれわれの白色地帯との出会いであり、その恐ろしさと楽しさを同時に味わうことができ、地図にたいする認識も新しいものになった。』(藤田, 1992)

梅棹、藤田が京都大学に進学した 1941 年に今西は京都探検地理学会の計画として、梅棹ら探検地理学会学生会員を主体にしたボナペ島調査隊を組織した。地質学を専攻した藤田はこの調査には参加していない。このボナペ島調査で今西は、船の航法に用いられる天測法に思いついた。

あくる年の 1942 年に、今西を隊長に京都探検地理学会の大興安嶺探検が実現した。梅棹、藤田らが白色地帯を踏破したのであるが、天測を実施し

ながら行動している。GPS (全地球測位システム) が発達している現在では考えられない行為である。

京大を卒業した梅棹、藤田は、戦後に設立された大阪市立大学に職を得た。京都探検地理学会は戦後すぐに解散した。そこで今西は、探検を組織する団体として京都大学生物誌研究会を 1951 年に発足させた。生物誌研究会が中心となって、1955 年に京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊を実現させた。梅棹、藤田はともにこれに参加した。

探検は、次の新たな探検を生む。1955 年の探検に刺激された京大山岳部の現役学生が、自分たちもヒマラヤ遠征を実現させたいと望んだ。彼らは山岳部から分離して、独自の組織としての学生団体「探検部」を発足させた。1956 年に京大探検部の最初の海外遠征隊が藤田を隊長にして実現した。これが京大・パンジャブ大学合同東部ヒンズークシ学術調査隊である。

1957 年には、1955 年の探検隊に参加した地質学教室教授の松下進を隊長に、やはり京大探検部のスワート・ヒンズークシ学術調査隊が成立した。

これらは日本最初の学生主体の海外学術調査隊である。それら調査隊の隊長をつとめたのが地質学の分野の研究者群であった。それだけではない。京大の学生探検の中核を地質学の藤田が担っていた事実は忘れてはならない。藤田の行跡を中心に、京大の地質学教室の特異な行動を紹介したい。

2. 京大の学生探検の系譜

1902 年生まれの今西は、第三高等学校在学中に山岳部を創設し、京都帝国大学に進学後は、旅行部のリーダーとなった。京都帝大には伝統的に山岳部はなく、旅行部と称していた。当時の旅行部長は、農学部教授の木原均である。旅行部は、もっぱら、外地あるいは海外へのエクスペディショ

ンの企画実行をはかるという、先鋭的な団体であった。京大卒業後、今西は1931年に京都大学学士山岳会を創設した。京都帝大旅行部が、学士山岳会の母体となり、ヒマラヤ登山をめざす実行団体としての性格をつよめた。

1930年代の終わりのころには、京都帝大旅行部の主流は、多分にスポーツ的な遠征登山にかたむいてゆく。その一方で、外国への遠征は本格的な探検—学術探検へと重点を移す動きも顕著となっていた。1939年に京都探検地理学会ができて、国外遠征の主体が学士山岳会や旅行部から探検地理学会に移った。この会の会長は京都帝大・羽田亨総長で、アルピニスト系の人たちのほかに、活発な野外研究者たちが加わり、京都探検地理学会は、学術探検隊を送り出す母体としての性格を強めた。学生会員の入会も許され、そこへ旅行部の部員たちが大量に入会した。

梅棹や藤田は、このような時代に三高山岳部に属し、そして京大に進学した。京大では旅行部に属さず、京都探検地理学会の会員として行動するようになった。

三高時代のことを藤田は、次のように述懐している：

『私は1937年に三高に入り、山岳部に入部した。中学校時代は、六甲の南麓に住んでいた性もあって、今西さんが邪道視した「芦屋のロックガーデンあたりで発達したアクロバティックな岩登り」を正統的な山登りと思って入部したのに、そこで見出したのは、ワンダリングと称して、地下足袋をはいて北山のヤブくぐりをする登山で、戸惑いました。

そんな私に、北山に急速になじんでいくきっかけを与えたのは、1年先輩で、やはり大阪から京都へ来た吉良竜夫が教えてくれた、今西さんの考えであった。』（藤田、1977）。三高で藤田は、1年前に入学していた梅棹に急速に接近してゆく。

三高山岳部の川喜田二郎、吉良竜夫、伴豊とともに、梅棹と藤田は、今西に接触した。藤田の述懐：

『ぜひとも今西さんに弟子入りしようということになったのですが、当時のわれわれからみると、今西大先輩は雲の上の人。しかし前から家が近くて交渉のあった川喜田が仲介になって、ある日今西さんにわれわれの行きつけの富久屋といううどん屋の二階へ来てもらいましてね、二階のがらんとした部屋でした。これが今西さんとわれわれの結びつきのはじまりなんです。』（今西ほか、1975）。

今西を中心に、梅棹、川喜田、吉良、伴、藤田の5名が結びつき、このグループは「ベンゼン核」とあだ名された。「団結は鉄よりも固く、人情は紙よりも薄し」がグループの標語であったという。

かれらは、三高時代からはなばなく活動を開始した。1938年の川喜田の硫黄島調査、1940年の梅棹、伴、藤田の白頭山登山、川喜田の白頭山外輪山、1941年の梅棹のカラフトの犬ぞり調査などである。

1941年に全員が京都帝国大学に進学した。専門は、梅棹が理学部（動物学）、川喜田と伴が文学部（地理学）、吉良が農学部（植物生態学）、藤田が理学部（地質学）である。京都探検地理学会は月一度の例会を開いていた。梅棹たちは、白頭山からかえったとき、その例会でお歴々をまえに講演するという、高校生としては破格の光栄に浴していた。探検地理学会の理事であった理学部動物学教室教授の駒井卓らの厚意で、動物学教室うらの小さな建物が、探検地理学会のジュニア・メンバーのクラブ・ハウスにあてがわれた。そこを根拠に、かれらは探検地理学会の乗っ取りにのりだそうと相談していたという。

学生にとって、溜り場としてのクラブ・ハウスがいかに重要かは、現在の学生の部活動の実態をみれば、容易に理解されよう。駒井らの厚意は、かれらの活動を実現させるにあたって、そうとう

な力となっていたのである。

3. 三高山岳部

三高の山岳部時代に、梅棹や藤田はどのように考え、行動したのか。梅棹が書き残した文章を紹介しよう：

『大正末期以来、パイオニアとして、学生登山者のはたした役わりはおおきかった。内地の山やまの、ルートを異にした、あるいは季節を異にした、いわゆるヴァリエーションを追求してきたかれらは、その範囲においてはすでにパイオニアとしての仕事がおわると、当然あたらしき領域をもとめて、外地の山やまへと遠征していった。(中略)だが、やがて、それもつきてしまわざるをえなかった。

さらにあたらしき領域を開拓するためには、われわれは国外へ進出しなければならない。だが、当時の世界情勢は、ほとんどそれをゆるすべくもなかった。とくに、しだいに顕著になりつつあった学生の社会的地位の低下は、なおもこれを困難ならしめたのである。ことに、一介の高校山岳部にして、いったいなにができるのか。(中略)

われわれは登山に(パイオニアの)よろこびを見いだしたのではなく、じつは、開拓者としていきることのみ、真のいきがいをもとめえたのであった。(中略)われわれは、なによりも、未知の領域を欲していたのだ。(中略)われわれは、なんとしても、原始境をもとめて、内地をはなれなければならないのであった。(中略)

とおい外国へ、いや、ついおとなりの満州国内にある大興安嶺へゆくことすら、当時のわれわれの実力ではとうてい実現すべくもなかった。われわれの地位と実力とをもってして、実現可能、しかも原始にうえたわれわれの心をいくぶんでもみたくしてくれる場所として、われわれは朝鮮・満州

の国境地域をえらんだ。(中略)

われわれは、遠征(エクスペディション)をだそうとかんがえたのではなかった。原始の色なおこき朝鮮、満州の国境地域を、内地の、北山やその他とおなじような、ワンダリングの舞台として、開拓しようというのであった。(中略)装備は極端に計量であった。食料もおそろしく粗末であった。われわれは、外地の山やまにおけるワンダリングを欲したのであった。異民族のすむ土地、景観のちがった土地を、内地におけるのと同様の気やすさでほつきまわる可能性を開拓しようとしたのであった。(中略)

われわれは、登山家たるべきか、開拓者として生き抜くのか、の岐路にたつて、あえて登山家たることをすてて開拓者への道をとったのである。われわれの情熱は、妥協にあまんずるにはあまりに強烈であった。

われわれの白頭山行は、当時われわれが属していた三高山岳部にとっては、ほとんどそのゆきずまりに血路をひらく結果とはならなかった。しかしながら、われわれ白頭山へいった3人にとっては、その血路はひらかれたのである。どうにもならない登山界の現状から一步を脱して、とにかくにもパイオニアとしていきてゆく道をひらくことができたのである。白頭山行は、あたらしき登山の発足として計画されながら、結果としては、われわれが登山界をみすてて、探検家としてその開拓者的生命を発揮してゆく契機をつくったものであった。われわれは、この行を媒介として、三高山岳部や日本登山界をとおしてではなしに、それらをうみだし、指導してきた巨大なる伝統に直接むすびつくことができたのであった。

そして三高山岳部自体は、その後のわれわれのあゆんできた道に対して、ほとんど無感覚であったとしても、当時、部をあげての熱誠なる後援と帰洛後の心からなる歓迎とをもって、当時の隊員

3人をしてその行を完了せしめ、たとえその3人が三高山岳部をみすて、日本山岳会をみすてたとしても、結果からいえば、梅棹、藤田、伴なる3人の開拓者を、あたらしき建設のために、探検家として、おくりだすことができたのであったならば、それによって、その使命の一部をはたしたということになるまいか。

この白頭山行という行為は、このように、われわれにとってはおおきい意味をもつものである。』(梅棹, 1943)。

こうして藤田たちは、北朝鮮、中国吉林省にまたがる白頭山の登頂を試みた。

4. 地図を読む

三高山岳部員は、地図を読む能力はすこぶる高いものがあつた。藤田は次のようにふり返っている：

『三高山岳部に入ってまず教えられたことは、5万分の1の地形図をたよりに、京都の北山の道のない谷でも尾根でも、自由に歩くことであつた。北山で地図を読みこなせたら、地図さえあれば世界中どこでも歩けるといわれた。私はいまでもそれを確信している。』(藤田, 1992)。

いざ白頭山へと遠征に出発したが、その周囲の地図がない。しかし、白頭山の山麓の神武城までいくと状態は急展開した。そのあたりの事情を梅棹が次のように記している：

『わたしたちがこの警備隊についた晩、警備道路工事の主任技師が空中写真測量による10万分の1の地図(非公開)をもっているのをみせてもらい、なお、満州側の集落、警備隊、道路、匪賊の状況についてかなりくわしくきくことができたのである。(中略)地図をみると天池からあふれた水は、大森林をつらぬいてほとんど真北にむかって延々とにびて三道白河となり、第二松花江源

流の主流を形成している。(中略)しかも地図によれば、頂上より数日の下降ののちには、かならず人家にでるはずである。(中略)

わたしたちはさっそく地図の要点をうつしとった。』(梅棹, 1995)。

こうして梅棹、藤田らは白頭山に登頂してからは、真北に向かって行進を開始した。ところが、その地図は正確ではなかったのである。地図が正確でないなどということが、信じられるだろうか。梅棹は次のように述べている：

『わたしたちは四囲の状況、支流の状態等より、わたしたちのうつしてきた地図が全然あてにならないことを発見して、3日目からはルックザックのなかへしまいこんでしまった。あとは磁石と勘である。』(梅棹, 1995)。

しかし、梅棹たちは、最初の3日間はその地図を信用していたのである。それがあてにならないとわかってくるときの焦燥感、容易に察しがつく。かれらは食料の制限をはじめ、危機にそなえた。藤田は記している：

『注意しなければならないのは、隊員相互の精神的離反である。だがこの点われわれは安心してよかった。神武城の夜、天池より真北にくだる案がでた時、即決した心の一致は、少しも乱されていないし、これこそ、われわれがパイオニアの大きな資格のひとつとして養ってきた精神ではなかったか。われわれは闘うことそのものに生命的歓喜を見いだすのであって、成果を求めるために闘うのではなかったのではなかろうか。』(藤田, 1992)。

地図では松花江の源流が、谷ひとすじちがっていたのである。地図で三道白河と思いこんでいた谷筋が、じつは二道白河だったのである。5日目に人家のあるところに出て、この遠征は終わる。

9月の新学期のはじめの三高全校生徒の集会で、梅棹は白頭山行の経験を講演した。この講演は、

大成功であったという。梅棹は、さらに次のように記す：

『わたしが神武城においてかきうつした秘密地図は、空白部のいっぱいある未完成のものであったが、川すじだけはちゃんとつながっていた。それがまちがっていたのである。わたしがこの地図のまちがいのことを指摘したところ、きいていた配属将校の陸軍大佐が、「そんなことはありえない」といいだした。この帝国陸軍の無謬性を確信している軍人は、軍が精密な機械をもちいて作製した地図にまちがいなどあらうはずがない、というのである。しかし、これはかれの過信である。わたしはその後、新京の満州航空で、空中写真から地図をつくる現場をみてしっているが、空中写真をはりあわせる段階は、肉眼と手作業でおこなわれ、ここでまちがいがおこる可能性はじゅうぶんにあるわけである。おなじような地形が連続していたために、技師たちがまちがってつないだのであろう。』（梅棹、1995b）。

地図について、このような強烈な経験をすることとは、ふつうはあり得ない。しかし、結果として、藤田たちは「白色地帯」を踏査するという、これもまた強烈な経験をすることになったのである。この経験がのちの、大興安嶺探検のときに生かされる。

5. 大興安嶺の白色地帯の踏破

1941年に今西は、探検地理学会の学生会員を主体にしたポナペ島調査隊を組織した。ちょうど、学生のもっている力が、貴重な人的資源として、ようやく軍の注目をひきはじめた時代だった。ポナペ島調査隊が横浜を出航して数日後に、学生の海外旅行禁止令がでた。そのような時代の探検隊の派遣である。「ベンゼン核」の梅棹、川喜田、吉良はこの調査隊に参加したが、藤田は京都大学の

重力測定班にくわわって、満州にわたっていたし、伴は内モンゴルにもぐりこんでいて、参加していない。

1942年に、ついに、今西は大興安嶺探検隊を組織した。学徒出陣で兵役にとられた伴をのぞいて、「ベンゼン核」の全員がこの探検隊にくわわった。

この大興安嶺探検隊が最も重視し、かつ不安も強かった部分は、「白色地帯」である。これはたとえばアムンゼンが人類初の南極点をめざしたときのように、地図も航空写真もなく、ゆくてに何があるかわからない。最も頼りになったのが、天測による位置確認である。担当した藤田は次のように書いている：

『そのひとつの手段として浮かんだのが、航海にもちいられる天測航法の利用であった。というのはその前年、ポナペ島の探検をすませ内地への帰途、セクスタントといわれる六分儀一丁をつかって天測によって簡単に船の位置がきめられているのをみて、そのとき既に大興安嶺計画を頭にえがいていた今西隊長に直感的にひらめいたのがこれであった。それは太陽とか北極星のような天体と水平線とのなす角度をセクスタントで測定、同時に測定した時間を正確にはかることによって緯度と経度を計算し、船の位置をきめるという方法である。陸のなかの海ともいえる大興安嶺は、緯度にして三度にわたる広さであるから、天測をたよりに突破できないであろうかというのが、発想の源であった。その役目は、われわれの探検仲間では比較的メカに強いと自負する私にまわってきたが、実際にはどうすればよいのか。

まず宇宙物理学教室の教授をたずねて教をこうたが、高級で高価な器械を使う方法はご存じでも、安くて軽いセクスタント一丁で陸上で天測をやろうという学生のアイディアには答えがなかった。そこで今西さんの思いつきで、のちの南極越冬隊長、西堀栄三郎先輩の門をたたくことになっ

た。今西さんにいわせると、「西堀は飛行機から腕時計までなんでも直せるという男や。樺太でも地図をつくったんやから、何かいい考えをだしよるやろ」ということであつた。

当時東京はすでに防空体制にはいって、まっくらななかを、なれない東京を迷いながら、西堀さんの自宅を探しあてた。西堀さんは京大の化学教室の助教授から東京電機のちの東芝の研究所に移られたばかりの忙しいなかで、夜おそく帰ってこられたのであるが、この初対面の学生相手にころよく相談にのっていただいた。しかしこのメカニズムの神様もやはり具体的なことになる経験がないのは当然であるが、さすがに問題の核心を見抜く直感はするどかつた。海上では水平線を使えるから天体との角度がよいに測れる。ようは陸上でそれに代わるものを探せばよい。それには水銀だ。ここまで西堀的発想を聞けば、後はわれわれの仕事であると自信がわいてきた。これが西堀流のやり方を学んだ第一歩であつた。(中略)

帰って、水銀を使って野外で人工水平面をつくる方法を模索した。人工水平面をつくるために水銀をいれる器具は大阪の測量器具店の倉庫に眠っていた。それは鉄製の長方形の浅い皿に水銀を流し込み、それに屋根形のガラスの蓋をして、片方のガラスを通して入ってきた光を水銀面で反射させ、他方のガラスを通してセクスタントでとらえるという簡単な仕掛けである。人工水平儀という名前がついていた。(中略)

われわれが拠点としていた京都探検地理学会の事務局があつた動物学教室の別館の片隅で、練習がはじまつた。(中略)

さてやってみると、思いがけないことがいろいろ起こってきた。まず重い金属製の壺の水銀を人工水平儀の皿に移して人工の水平面をつくるのも、決して楽な仕事ではない。さらにその水銀面に反

射させる天体は太陽と星であるが、そこが北緯 53 度という高緯度であることを忘れていた。夜は白夜に近かつた。北極星がはっきりと見えるようになるには、午前二時ころまで待たなければならない。そしてさらにわかつてきたことは、たとえそれを待ったとしても、あの豆粒のような星を一回水銀面に反射させ、ともすればゆらぎがちなその反射像をつかまえることは、大変な熟練がいるということであつた。いきおい天測は太陽にたよるざるをえない。実際には午前 7 時頃に経度の観測、午後 1 時頃の太陽の南中した頃に緯度の観測、必要があれば午後 6 時ころにもう一度経度の観測を行うのである。激しい行進の間のこの作業は苦しいものであつた。同じ地点の経度と緯度とをそろえるには一日中滞在する日がえらばれた。』(藤田, 1992)。

実際の行動はどうであつたか。大興安嶺探検隊の記録から述べよう：

『6 月 15 日から、支隊は、いよいよ白色地帯にふみこむこととなつた。わずか 50 キロそこそこの行程とはいえ、航空写真のたすけをはなれて、天測と推測航法とをたよりに、目標のない大洋にいた世界にふみこむのは、やはり不安とあたらしい緊張とをともなう出発であつた。天測は、出発いらい、毎日のようにつづけられて、50 万分の 1 の地図上には、そこに印刷されたでたらめの山や河を痛快に無視して、天測点をつらねた細い線が、北へ北へとびつつあつた。天測結果の精度は、かなり優秀なようにおもわれた。とくに方法の性質上、緯度の誤差が経度のそれにくらべて、格段にちいさいことは、北にむかつてすすむわれわれにとって有利であつた。こういう探検用の天測法の手引きなどをしてくれる人のまったくない内地で、数冊の基礎的な参考書をたよりに、どくどくの方法をくふうし、観察野帳までつくりあげた、半年の藤田の苦心は、むくいられつつあつた。の

ちの、経緯度のわかった基地での観測の結果は、緯度の誤差1キロ以内、経度でも2-3キロをこえることはないことを確認させた。

持参した短波ラジオはよい性能で、毎日時報をキャッチしていた。ポケット・コンパスと歩度計とは、われわれのあゆみを、折れまがった線のつらなりとして記録してゆく。ひとつの天測点から出発して、つぎの天測点までのあいだをつなぐ、この折線は、つぎの天測に必要な、推定経緯度をあたえる。これが推測航法とよばれる行進法なのである。藤田の手でえがきだされてゆくこの骨骼線に、周囲の地形のスケッチ・マップの肉をきせてゆくのは、梅棹のしごとである。器用なかれは、白色地帯にはいるころには、測量隊のくろうとはだしの、きれいなルートマップを、手ぎわよくかきあげるようになっていた。ここまでの10日あまりの旅のあいだのトレーニングで、なにもかもが、スムーズに、まちがいなくはこぶようになったころ、うまく白色地帯がやってきたわけだ。毎日テントをはったのち、第一のしごとのひとつは、ラジオのアンテナをはることだったが、それでさえ、いまや熟練の域にまで達していた。藤田が、アンテナの一端に石ころをむすびつけエイとひとこえ投げあげると、みごとにねらった木の枝にからみつく。そのたびに、われわれは、かれのじまんをきかなくてはならないのであった。』(今西, 1952)。

天測による行動の結果はどうであったか。大興安嶺探検隊の記録から述べよう：

『19日の午後、たどっていた道すじが、右岸の急斜面へと通じていた。この谷にくだって2日め、もしわれわれの天測と推測航法とが正しかったとすれば、おそらくきょうは、ふたたび航空写真の圏内にはいるだろうとおもわれた。そして、この谷が、まさしく目指した地点そのものであったとすれば、推測航法の結果からおして、10キロばかり下流に、航空写真にあらわれた、ふたつのはげ

た崖がみつかるはずだった。われわれが、この道をえらんで、丘のうえにのぼったのは、そこから、この絶好のめじるしをさがそうとしたからであった。

われわれは勝った。どうだ。ちょうど予期したあたりに、まるで符丁をあわせたように、ふたつのはげが、目指した地点をみおろして、はるかにのぞまれるではないか。白色地点はおわった。わたしたちの意気はまさに天をついた。』(今西, 1952)。

こうして、日本では類をみない天測航法による陸地の「白色地帯」の踏破が、みごとに成し遂げられたのであった。

6. カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に参加

京大を卒業してから、1955年のカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に参加するまでの様子を、藤田は次のように語っている：

『三高の山岳部にいたころから京都探検地理学会に入って、梅棹(忠夫)君らと(北朝鮮の)白頭山の周辺をよく歩いた。京大理学部地質学教室の松山基範教授の満州での重力測定調査に無理に連れていってもろうて、大興安嶺の北の(アムール河流域の)漠河まで行った。その同じ時期に梅棹君らは今西さんに率いられてポナペ島に行った。だからボクはポナペには行っていない。大興安嶺の探検にはいっしょに行った。1942年や。だからボクは、学生時代は大興安嶺探検にあけくられてた。その話をいつも興味深げに聞いてくださったのが松下進先生やった。ボクはたびたび先生のお部屋に押しかけては長話をしたが、先生は例のゆったりした調子で聞き役になってくれはったな。

1944年のはじめに入隊した。もう卒業してたからね。フィリピンのセブ島に駐屯してた。終戦直前に帰営してたから、終戦は日本で迎えた。それ

で京大の地質に籍を置いて、大阪市大に入れてもろた。』(藤田, 2006)。

「ベンゼン核」のメンバーのうち伴豊は学徒出陣でフィリピンに出征し、戦死した。学生だった他のメンバー、梅棹、川喜田、吉良、藤田は全員、新設の大阪市立大学に職を得た。吉良と藤田は定年まで大阪市大に奉職し、名誉教授となっている。川喜田は東京工業大学に、梅棹は今西の後任として京大人文科学研究所に転じている。1955年の京大カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊には、梅棹と藤田が参加している。そのもようを、藤田は次のように語る：

『1955年の京大カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊は、今西さんの構想やった。

今西さんには、もともと、ヒマラヤをやってやろうという気があった。8,000mを越える峰が10座以上あるし、世界に8,000mを越える山はヒマラヤ以外にあらへん。ヒマラヤの登山活動は19世紀の末から始まってるけど、最高峰のエベレスト(チョモランマ)への挑戦は1922年の英国隊が最初や。ヒマラヤへの関心は登山だけやない。英国の登山隊には地質学者も隊員として参加していて、地質サンプルの採集や地質調査がちゃんとやられている。

だけど、ヒマラヤ登山の関心は、アプローチが比較的楽そうで、高峰の連なる東部のいわゆるネパール・ヒマラヤに限られてたな。もっと西のカラコラムなどは、K2などの一部を除いて、高度も低かったからやろか、登山への関心は低かった。京大グループは、既に第二次大戦以前から、この西方への興味を抱いていた。今西さんはK2は見たところ氷河がなく、岩登りの山のような。そこから、氷河の経験のない日本人でも、西欧の登山家に負けないのではないか、と考えたはったような。「エベレストは、イギリス人にまかせとけ」という今西流棲み分けかもしれない。今西さんの

頭のなかでは、エベレストよりもK2の方が存在としては大きかった。

こういう背景があったから、1955年の京大の探検隊は、ネパールよりも西のカラコラム・ヒンズークシを目指して、パキスタンからアフガニスタン地域へ派遣されている。この大探検は、文部省から500万円の研究費を引き出して、ちゃんとした報告書を出すことが至上命令やった。当時の若手として梅棹、中尾佐助、岡崎敬君やボクが実務をひきうけた。植物学、人類学とならんで地質学班はカラコラムでもっとも重要な役割をになわなければならないから、どうしても教授級の方の出馬が望ましいということになった。ボクもいろいろ考えてみたけど、このような計画に積極的にのりだして下さる方は誰やろと迷った。そこでこの計画のプロモーターの今西さんに相談すると、「それは松下さんやな」という答えがかえってきた。

それでおそろおそろ松下先生にカラコラムの話をもちだすと、なんの迷いもなく、「行きましよう」と返事された。先生は広く満州や朝鮮半島を歩かれた優れたフィールドワーカーやった。その究極の世界を秘境カラコラムに求められたのは、むしろ当然やった。今西さんの直感は正しかったんやな。この大探検隊は木原均先生のアフガニスタン隊と今西さんのカラコラム隊に大きく分かれた。カラコラム隊はさらにふたつに分離された。今西さんは世界第二の高峰K2を見たいから中尾君と山登りのルートの偵察に行かはった。松下先生が班長の地質班はギルギットで今西班と分かれてインドス渓谷をさかのぼって氷河地帯にはいった。そこで今西隊と合流してバルトロ氷河をつめて、K2の見えるコンコルディアまで行った。そこから今西さんたちが来たルートを逆にピアフォ氷河とヒスパー氷河を踏破して、フンザ川を南下してギルギッドにもどった。

地質班ていうてもメンバーは松下先生とボクに、

日映新社のカメラマンで映画『カラコルム』をつくった林田重男さん、それにパンジャブ大学の地理科の学生イナム・ウラ・ハーン君の四名だけ。カラコルム隊全員の氷河地帯用の食料輸送を引き受けているから、38 人の人夫を連れていかなあかん。大部隊の本格探検隊や。ボクは隊のマネジメントに全力をあげてた。先生のお世話する余力はあんまりなかったな。しかし先生は、100 キロ近くも直線的に延長するビアフォ氷河とヒスパー氷河にそって、大断層が走っていることを、両側の地質のちがいから見抜いておられた。しかしわれわれ自身が、この断層の重要性に気づいていなかった。このころは「地向斜―造山論」全盛の時代やった。プレートテクトニクスでヒマラヤ造山運動を考えるようになるのは、30 年もたってからや。松下先生は、その地質のちがいを、みごとに見抜いてはった。

もうひとつ、氷河の問題があった。ヒマラヤの急な谷間を押し出す山岳氷河をみてきた今西さんには、巨龍がのたうつように幅広い傾斜のゆるい谷間を押し出してくるカラコルムの氷河はまったくちがう。しかも、K2 の南側のビアフォ、ヒスパーというふたつの氷河は、ヒスパー峠 (5,550m) でふたつに分かれているけれど、一直線上にあって、総延長は 150 キロ以上になる。何でこんなに真っ直ぐに大きな氷河が連続するんや、というおおきな疑問がわいてくる。はじめて氷河を見たボクにわかるわけがない。

植物やら作物なら、いっぱい標本が手に入るから、それで論文書けるけど、地質はそういうわけにはいかん。ヒスパー川の流域を歩いただけでは、調査にならへん。なかなか難しくてまとまらない。大探検が終わっても、地質班は報告書のメドが立ってへんのや。岩石の記載だけで終わってしまう。つまり、地理学的探検の基礎となる地質的成果は、じゅうぶんではなかった。地質的な調査でトレ

スしたんは、パキスタンの北部山岳地域の東部だけで、中央部からパキスタン西部にいたる地域はトレースできてない。この地域は、他の地域とちがうて、いまだに地質的には全く未知で、インド地質の古典的集大成である「インドの地質」でも、まったく空白にされている。京大グループとしては、ぜひ調べたかった地域やった。』(藤田, 2006)。

つまり、カラコルム・ヒンズークシ探検隊の地質班は、じゅうぶんな調査が実施できなかったのである。ではどうしたか。藤田は次のように述べている：

『大探検の終わりのときに、パンジャブ大学のフマコン・ベグ教授に今西さんといっしょに会った。カラコルム・クラブの会長や。専門は地理学。今西さんは、ヒンズークシならライト・エクスペディションが可能やと踏んではったんやな。55 年の大探検だけで切らないで、続けましようという気持ちがあった。大人数の重装備にせんでも、学生主体の少人数の軽装備で、少ない予算の探検ならできる、と考えはった。それでベグさんに費用はパキスタン側負担、装備は日本側が負担するかたちでのジョイント・エクスペディションをもちかけはった。ベグさんがそれに乗らはった。その場には、ボクもおった。今西さんの頭のなかには、最初の学生探検の隊長は藤田にやらせようというのがこのときにあったかも知れんなあ。

それに、大探検のときはギルギッドより東の、要するにカラコルムの氷河ばかり歩いてた。それより西のヒンズークシの地質の方が、研究としてはおもしろい。探検部がそっちの方をやるのやったら、これは地質の仕事でもある、という考えはあったな。できたばかりの探検部は、まあ言うてみたら、どこでもいいから海外遠征隊を出したいという気持ちやろう。ボクにしたら、今度はヒンズークシの方をやりたい気持ちはあった。ベグさんとの話でも、ヒンズークシならライト・エ

クスペディションでやれる。こういう状況やから、ボクらと探検部の思惑がマッチしたんやな。

ヒンズークシ山脈がある地域は、地質学的に未知だっただけやない。パキスタンでは、辺境地域と呼ばれていて、独立した共和国であるパキスタンの領土でありながら、パキスタン政府が直接統治していない。ラジャーという地方の領主がいまだに統治していた。外国人の入国は閉ざされていたな。56年と57年の調査隊は、パキスタンのパンジャブ大学との共同探検隊やから、現地の交渉と手配はパキスタン側が主導して、日本側はそれに従うという形やった。そやから、入国が困難やった西パキスタンのアフガニスタンとの国境地域の踏査も許可が出たんや。この共同探検隊という形式は、今西さんとボクが、1955年にパキスタンの現地の状況を見て考案した、ひじょうに有効な探検手段であったといえるな。』(藤田, 2006)。

7. 京大に探検部が誕生

藤田たちは三高山岳部の時代から京都探検地理学会の学生会員となっていたから、京大進学後も、探検地理学会の会員としての活動を強化した。スポーツ・アルピニズムの傾向を強めていた旅行部だったが、外国、外地に遠征するなどというのは学生にあるまじき行為と考えられたのか、1941年には大学当局によって解散させられていた。また、京都探検地理学会も日本軍の協力のもとに大興安嶺探検をおこなった団体ということからGHQ(連合軍総司令部)ににらまれる可能性があったので、会員に解散の同意を回覧で得たうえで解散してしまった。このように、戦前の京大にあって野外での探検・登山に向かって先鋭的に行動してきた学士山岳会もふくめた三つの団体のうちの二つまでが戦中、戦後に解散してしまったのである。

戦後ほどなく学士山岳会が活動を再開させ、山

岳部も誕生した。しかし、その山岳部もスポーツ・アルピニズムを志向する傾向がつよく、探検地理学会のもっていた性格はほとんど姿を消していた。1953年には戦後の学士山岳会としてはじめてのヒマラヤ遠征の「アンナプルナ」登山隊が派遣された。この登山隊の派遣の準備には山岳部現役学生と、山岳部の卒業生である学士山岳会若手メンバーがあたった。しかし登山隊に参加できたのは学士山岳会の正会員のみで、現役学生は誰も参加していない。学士山岳会の若手メンバーである大学院学生が複数名参加したにとどまった。

この当時は、1952年に日本山岳会のマナスル偵察隊に学士山岳会会員の今西、中尾佐助、林一彦が参加し、1953年の第一次マナスル登山隊に川喜田二郎が参加しただけであった。マナスルもアンナプルナも、まだ登頂はされていなかった。

そこで、必然的に、山岳部の現役学生主体のヒマラヤ登山計画が持ち上がった。山岳部の卒業生が会員となる学士山岳会が主体の登山隊であるかぎり、現役学生が参加できる余地はまずない。それなら学生主体の登山隊を編成し、自分たちが参加しよう、と学生が考えたのはごく自然である。

この現役学生の動きに、当然ながら、学士山岳会の若手メンバーは猛烈に反発する。反対の「正統派」の理由は、現役学生では登山の経験不足で、実力がじゅうぶんでないから、海外遠征は実力をきちんと身につけた学士山岳会のメンバーでやるべきだ、というものである。しかし、この「正統的」な理由を口にする学士山岳会若手メンバーの心理状態は、じっくり検討する必要がある。とても額面通りには受け取れない。その心の裏側にひそむ、現役学生の時代にヒマラヤ遠征に行く者に対する嫉妬、ねたみ、そねみ、やっかみ、うらみ、反感などの、複雑な感情を無視することはできないからである。

山岳部のなかで討議を重ねた本多勝一たち 10

名の山岳部員は、1956年3月5日に、山岳部から分離して、探検部を独立して成立させた。このあたりのいきさつは、『京大探検部 1956-2006』（京大探検者の会編、2006）にくわしい。

探検部の現役学生による探検計画がもちあがったとき、当然のことながら、強い反対をうけた。はたからみれば、クチバシの黄色い青二才がたくさんのお金を使い、学校をサボって、カラコラムくんだりまでなぜゆかなければならないのか。「もっと実力のある者、仕事のできる者がいるではないか。君たちは生意気をいわずに勉強しなさい。」というわけである。ここらあたりは、山岳部の現役学生主体のヒマラヤ登山計画に学士山岳会の若手メンバーが猛烈に反発したのと、心理的には同質のものであろうと思われる。

これにたいして、「探検などやろうとおもったら、はやくから実地の経験をつむほどよい。しかも合同探検は習慣のちがうパキスタン側とうまく折り合いをつけてゆかねばならない。その点未完成な学生の適応力に期待できる。学生同士の交歓も意義があろう。学問的实力、あるいは登山技術など、多くを要求しないで、学生なりに最善をつくさなければよいではないか。」（松下、1968）と探検部学生を推してくれたのは今西のほか、梅棹、川喜田、中尾佐助、藤田らであった。彼らは、かつては京都探検地理学会の学生会員であり、日本最初の学生探検の経験者なのであった。彼らこそが、探検部のシンパ（シンパサイザー）であり、サポーターであり、また時にはアジテーターとなって、探検部の活動をささえる役割をになったのであった。

大探検隊のカラコラム支隊がカラコラムへの門戸のラワルピンディについたとき、パンジャブ大学地理学科の学生が支隊長の今西を訪ねてきた。そして、大探検隊に参加を希望した。彼がイナム・ウラ・ハーンで、彼の参加が探検部の日本・パキスタン合同の探検隊となって実現する発端となっ

た。ラホールにカラコラム・クラブというのがあって、パキスタン北部の探検・登山を目指しており、その中心人物がA・H・ベグ教授であることなどを、ハーンは語った。

このベグ教授との細い結びの糸を太らせて、日パ合同探検が実現できるとにらんだ今西支隊長の眼力はさすがというほかない。

学術探検というものは、一回だけで終わるものではない。カラコラム探検はまた次の課題を生みだしていた。その解決には、つづいて探検隊をだす必要がある。新しい試みとして合同という形でやってみよう。それにヒマラヤ、カラコラムといえはおえら方や先輩ばかりが出ることになる。今度は思い切って学生にやらせてみよう。これが今西の基本構想であった。

本多たち現役山岳部学生の遠征志望と今西の構想は、こうして重なり合った。1955年の暮れに、パンジャブ大学の元総長でパキスタン駐日大使マリク博士が京都大学を訪問された。パンジャブ大学との合同探検隊が話題となり、大使の紹介で、京都大学総長からパンジャブ大学総長へ、今西からベグ教授へ、合同探検案が送られた。1956年の2月になってパンジャブ大学から受諾の返事が届いた。

本多たちは山岳部の計画としてこの遠征を実現させることは無理だと判断し、別組織の探検部を独立させることに決心した。文化団体「探検部」を学生部に届け出たところ、学生部長木村作次郎はクラブ・ハウスとして西部構内の一室の使用を許可してくれた。木村は学士山岳会の会員でもあった。探検部はその発足から、学生部からも暖かく見守ってもらったのである。探検部はその拠点をルームと呼んだ。

探検部の誕生を祝して、梅棹は次のように書いた：

『京大に探検部ができた。そして創立第1年度

においてはやくも国外に遠征隊をおくるといふ。そのはつらつたる活動ぶりは、さすがの戦前派の老兵たちにも、目をみはらしめるほどのものがある。

西部構内の探検部のルームにはいる。壁にはりめぐらされた、極東から北アフリカにいたるまでのさまざまな縮尺の地図。雑然たる机のうえの事務的書類。洋書の探検記録。陽気で、しかしどこかストイックな感じの学生たち。探検部は、たったいま創立されたばかりだというのに、これはまたどうしたことだろう。

この雰囲気には、わたしは記憶があるのだ。これは、いまから15,6年もまえに、わたしたちがこの大学の学生であったころ、わたしたちをつつんでいた、あの雰囲気こそではないか。

それは、伝統の力というほかはない。探検部は、一見、ちかごろの探検ブームに刺激されて出現した典型的アプレ・ゲール部のようにみえながら、じつはそうではない。それは、戦前に、おなじこの大学のなかに生まれ、活発な活動ぶりをしめしていたところの、学生探検家のグループの正統的継承であったのだ。それは、新設の部ではない。再興であり、復活なのである。』(梅棹, 1956)。

京大探検部は、新設の部ではなかった。京都探検地理学会の探検的性格の再興であり、復活だったのである。梅棹はそれを祝したのであった。

8. 藤田と探検部の思惑が合致して、探検隊が成立

藤田は、どうして京大探検部の第1回海外遠征の隊長を引き受けたのか。藤田は語る：

『本多(勝一)君たちが学生団体の探検部をつくろうとさかんに動き回っていた(1955年暮れ)ときには、ボクはすでに(1953年に)大阪市立大学に移っていたので、その詳しいことは何も知ら

なかった。1955年の探検隊に、大阪市立大学の教官の立場で参加して、明くる年の京大探検部の最初の遠征隊の隊長をやることになった。他の大学の計画に加わることは、市大のなかでやっぱり抵抗はあったな。それに、55年の大探検隊には文部省から京大に研究費が出るのに大阪市大の助教授が入るのはおかしい、という声もあった。それで京大の講師にしてもらった。今西さんが電話かけてきやはって、お前、隊長やっつたれ、というて。それで本多勝一君と吉場健二君の1956年の「東ヒンズークシ学術調査隊」の隊長を引き受けることになった。しかしボクとしては2年続けて出るのは、ひじょうに苦しかった。1年目はわーっとやってくれたけど、2年目は助教授クラスで、しかも他の大学の計画で出るといふのは、たいへんやった。それでも出られた。

それで、まずヒンズークシでも東の方からやろうと思うた。西の方のスワートなら許可がすぐに出るから、東ヒンズークシから先にやろうとしたんや。そしたら、許可に手間取った。1月以上もかかって、やっと調査の許可がおりた。それで、ギルギットから西の地方を踏査することができた。本多君らが来ることになっていた貨物船が、予定よりも2ヶ月も遅れてしもた。両方が遅れて、大事にはいたらなかったけど、たいへんやった。

56年は東をやって、57年の松下先生のスワート・ヒンズークシ隊に引き継いだ。最近になってパキスタンとアフガニスタンの国境ぞいに南北に延びるチャーマン断層というのが発見されている。インド・プレートが西縁が檜の穂先状に北に突出して、パミールの方に押し縮めゆく。その北側にあるカラコラムからヒンズークシにかけての地質構造が、それを取り巻くようにゆるやかに曲がってゆくことを、松下先生とボクのヒンズークシの調査で明らかにすることができた。これは地質学上の重要な発見やった。

プレート論による構造解析によって、インド・プレートが北上してきて、ユーラシア・プレートと衝突して、ヒマラヤ山脈ができたことがわかってきた。東の方では幅 500 キロ以上に広がってチベット高原は、西へゆくほど圧縮され、カラコラムでは幅 200 キロ程度に縮まり、それだけ高くなって高度 4,000~5,000m 級の高原をつくっているのや。谷は深いけれども傾斜はゆるい。そこへ K2 のような 7,000m 級以上の山群から氷河が押し出してくるから、緩傾斜の幅広い氷河ができたことになる。ピアフォ・ヒスパー氷河が直線的に続いているのは、断層に沿って氷河ができたのであろうことは、松下先生が当時すでに指摘しておられた。これもそうだということが、最近になってわかってきた。カラコラム探検は 1955 年やから、30 年近く早すぎたことになるな。

大探検の報告は、英文で B5 版の報告書全 8 巻にまとめて出版した。地質はそのなかの第 7 巻と、第 8 巻の一部で報告してある。この報告書は地質学者以外に見る人はまずいないやろう。55 年の大探検隊の報告書やけど、地質の内容は、ほとんどの部分が 56 年と 57 年の学生探検隊のときのものや。ボクと松下先生にとっては、55 年の大探検だけでは不完全やったんやな。56、57 年と続けた、3 年継続の調査でやっとひとまとまりになる調査になった。それではじめて大きな構造が浮かび上がってきた。

大探検隊の地質学の分野の要求と、学生探検部の希望が、ヒンズークシで合致した。それはまさに今西構想にすっぽりはまり込むものやった。ボクにとっては京大探検部の最初の遠征に隊長として乗り出すことに、何の抵抗もなかった。ボク自身が犬安嶺の学生探検を経験していた。55 年にカラコラムの学術探検をやった。明くる年にその延長でヒンズークシに学生探検の指揮を執る立場に身を置くのは、自然の流れやった。

それに何というても、学生隊員の本多君と吉場君が優秀やった。いうことないわ。』(藤田, 2006)。

探検部にしてみれば、藤田が隊長を引き受けてくれたので、いうことなかったのである。

私事にわたるが、私がカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊の英文報告書を読んだのは、1999 年である。その年の 4 月から、私は京大総合博物館長に就任していた。2001 年の開館に合わせて、企画展示として『今西錦司の世界』を実施すべく、準備を進めていた。資料集めの過程で、今西が推進した同探検隊の報告書は不可欠と判断した。同探検隊の推進母体は京大生物誌研究会であるが、科学研究費補助金の申請機関は人文科学研究所である。人文研に報告書は保管されているはずで、余分があれば、寄贈してもらえらるはずである。そう考え、谷泰に連絡をとった。谷は梅棹の後任として、人文研の教授であった。山岳部の出身で、学士山岳会の会員でもある。1962 年の学士山岳会のサルトロ・カンリ登山隊の隊員であった。谷は人文研の図書を整理し、同探検隊の報告書もきちんと保管体制を確立していた。英文報告書全 8 巻を総合博物館に寄贈してもらった。

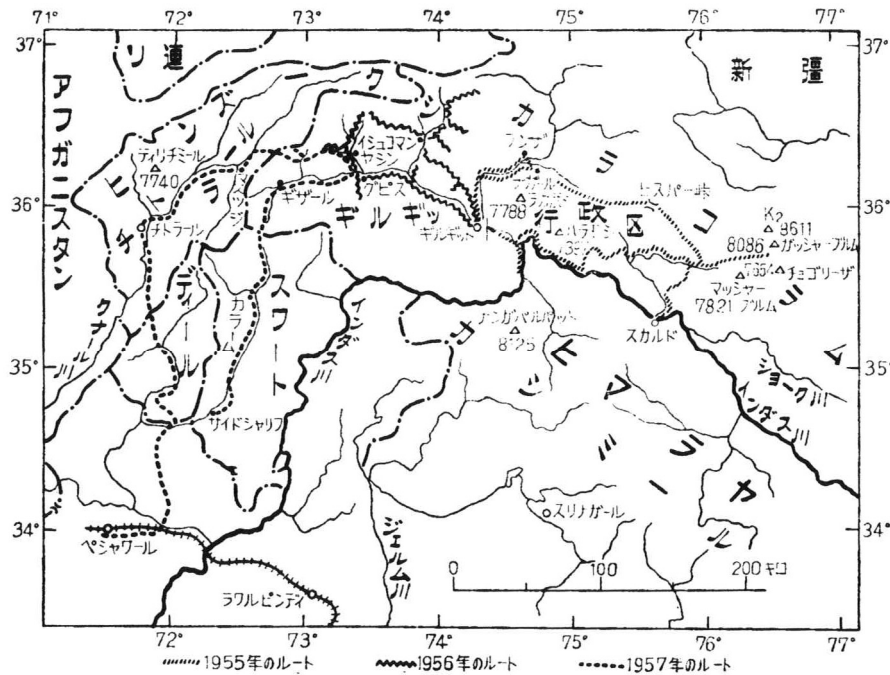
そして、地質の部分を開いて、おどろいてしまった。報告書第 7 巻の調査地域の地図には、55 年の探検隊が歩いた地域はふくまれていないのである(図 1, 2)。56 年と 57 年の、探検部がカバーした地域の地質状況が報告されているのである。55 年の調査地域の地質概況は、第 8 巻の Additional Reports に収録されている。

探検部の計画がなかったら、藤田や松下は困っていたのではないか。探検部は、一方的に先輩方の世話にばかりなっていたのではなかった。探検部は、堂々と胸を張ってもよいのである。

参考文献

藤田和夫 (1977) : 「解説」, 今西錦司『山岳省察』,

- 講談社学術文庫，講談社.
- 藤田和夫 (1992) : 『アルプス・ヒマラヤからの発想』，朝日文庫，朝日新聞社.
- 藤田和夫 (2006) : 「探検部の学生を率いて」，京大探検者の会 (編) 『京都大学探検部 1956 - 2006』，新樹社.
- 今西錦司 (編) (1952) : 『大興安嶺探検 1942 年探検隊報告』，毎日新聞社.
- 今西錦司 (編) (1991) : 『大興安嶺探検 1942 年探検隊報告』，朝日文庫，朝日新聞社.
- 今西錦司・石毛直道・藤田和夫 (鼎談) (1975) : 今西錦司ほか 『今西錦司の世界』，平凡社.
- 京大探検者の会 (編) (2006) : 『京大探検部 1956-2006』，新樹社.
- 松下進 (編) (1958) : 『スワート・ヒンズークシ紀行』，三一書房.
- Matsushita, S. K. Huzita (1965) : *Geology of the Karakoram and Hindu Kush. Results of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, 1955, Vol. VII. The Committee of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, Kyoto University.*
- Matsushita, S. K. Huzita (1966) : *Geological Research in the Western Karakoram. Additional Reports (Ed. by Kitamura, S. & R. Yosii), Results of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, 1955, Vol. VIII. The Committee of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, Kyoto University.*
- 梅棹忠夫 (1943) : 「北鮮・白頭山――まえがき」，『三高山岳部報告』第 15 号，嶽水会山岳部.
- 梅棹忠夫 (1956) : 「戦前版・学生探検隊の記」『学園新聞』第 843 号，1956 年 5 月 28 日，京都大学新聞社. (梅棹忠夫著作集，第 1 巻「探検の時代」，中央公論社，1990 に再録)
- 梅棹忠夫 (1995a) : 「白頭山をこえて満州へ」，梅棹忠夫・藤田和夫 (編)，1995，『白頭山の青春』，朝日新聞社.
- 梅棹忠夫 (1995b) : 「白頭山をこえて松花江源流へ」，梅棹忠夫・藤田和夫 (編) (1995，『白頭山の青春』，朝日新聞社.



京都大学より派遣された三隊のルートを示す

図1
京都大学から派遣された1955, 1956, 1957年度隊の調査ルートをしめす。1955年の大探検隊はギルギットより東の地域を踏破した。1956, 1957年度隊は、ギルギットよりも西の地域を調査した。松下(1958)より。

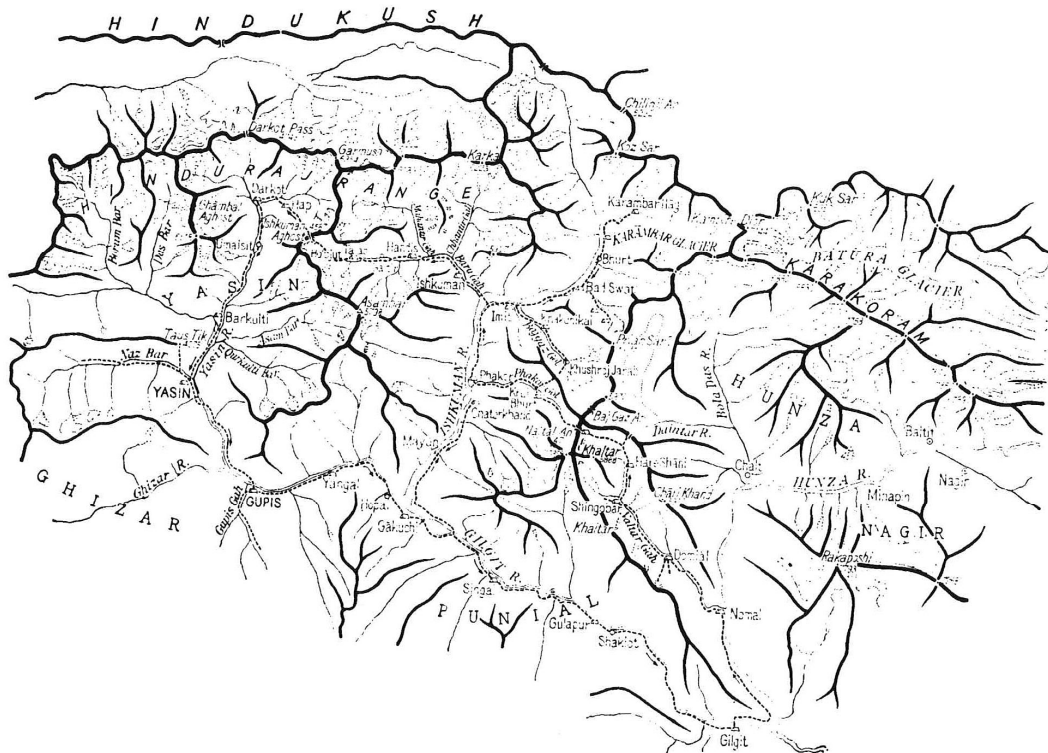


図2 京都大学から派遣された1955年度隊の正式英文報告書に掲載された地質学班の調査地域図。ギルギットの北西部を踏査したことがしめされている。これは1956年度隊が調査した地域で、京都大学隊にとっては、この地域の調査の成果がいかに重要であったかを物語っている。Matsushita & Huzita (1965) より。